

大空 (生徒・保護者向け) 14号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和2年7月31日(金)

プリコラージュとしてのNIE(附属中学校1学期終業式講話)

□本日の概要

- レヴィ・ストロースは、未開人が、将来何の役に立つのか分からないが役に立ちそうだというものを集めて新しいものを作り出すことをプリコラージュと名付け、無関係のようなものを独自の視点で結びつけることを「野生の思考」と名付けた。
- 将来役に立つかもしれないものを見極める力が「感性」であり、それを身につけるには本物との出会いが必要である。
- 本物は身近な所にある。例えば、新聞記事の収集もプリコラージュになる。この夏は、自分のプリコラージュを増やしてほしい。

□附属中学校の皆さんへ

中学1年生の皆さんとは入学式で会ったとき以来、2年生、3年生の皆さんの前で話すのは、何と初めてです。同じ学校にいながら遠い存在ですね。授業中、時折廊下を歩いている私が校長です。長々しい通信を書いて配っていますが、皆さん読んでいますか。中学生の皆さんはピンとこない内容かもしれませんが、附属中の皆さんになら通じるはずと信じて、敢えて中学生向きの表現はせずに書いています。

□入学式で語ったこと

私は入学式で4つのお話をしました。これは2・3年生にも共通することですので、少し振り返ります。

- 新しい仲間との出会いを大切に、未来への夢をふくらませよう。
- まず感性を磨こう。感性を磨くには、本物の芸術(Art)に触れなければならない。
- さらに芸術だけでなく、自然科学、社会科学、人文科学分野を含む「Liberal Arts」つまり「教養」を身につけて欲しい。
- 富士山のような広い教養の裾野を身につけ、若竹のようにぐんぐん伸びて欲しい。

今日は、その中で、「Art」、すなわち教養について、再度触れたいと思います。

□プリコラージュを選び取る感性

フランスに文化人類学者のクロード・レヴィ・ストロース(1908~2009)という人がいました。文化人類学という学問は、「人間の生活様式全体(生活や活動)のありかたを研究する人類学の一分野」(Wikipedia)ですが、もともとは欧米で始まった学問で、欧米人が遠い外国の奥地の、いわゆる未開と思われていた民族を観察するところから始まった学問です。欧米の学者が驚いたのは、未開と思われていた民族にも、社会システムを維持するための文化を持っていたことです。レヴィ・ストロースは、未開の民族が、今、それが何の役に立つのか分からないが、将来、何かに使えそうだというものを集めて、新しいものを作りだし、実生活に対応していることに着目し、それを「プリコラージュ」と名付けました。「プリコラージュ」はフランス語で「寄せ集め」の意味)そして、まったく無関係のように見えるプリコラージュ同士を独自の視点により大胆につなげることを、西洋人が重視してきた理性的思考や科学的思考と対比するものとして「野生の思考」と呼んだのです。画期的な発明やイノベーションは、この「野生の思考」のような飛躍的な発想がないと生まれませんが、何が「ゴミ」で、何がプリコラージュであるかを見分ける力が、「感性」なのです。

入学式では、感性を磨くために、様々な「本物」に触れて欲しいと話しました。本来ですと、夏休みはこの「本物」に触れるチャンスです。平常時なら、様々な体験を積んで欲しいと言うところですが、今は新型コロナウイルスの危険があり、安全面を考えると、宮崎県外に出ることや不要な外出は勧められません。でも、夏休みに何もできない、つまらないと嘆かないでください。「本物」は、何も旅行などで、よそに行かなければ触れられないものではないのです。今はインターネット等で多くの情報が手に入ります。読書でもいい、芸術でもいい、研究でも

いい、身近でできることはたくさんあります。様々なことにチャレンジして、自分のプリコラージュを増やしてください。

ロプリコラージュとしてのNIE

最も手軽にできるプリコラージュとして、皆さんが取り組んでいるNIE (Newspaper in education) があります。新聞スクラップは、もう何十年前からある古典的勉強法ですが、これは今でも変わっていません。新聞をきちんと読み、疑問に思い、自分の考えをまとめるだけで、飛躍的に力がつきます。

私は平成4年度から平成11年度の8年間、この宮崎西高校に勤務した時、実はNIEを担当していました。私は、国語を教えているクラスの生徒に新聞スクラップノートをつくらせました。毎週1回提出させており、夏休みもその延長としてNIEに取り組ませました。すると、当時理数科の高校1年生だった松田さんは、自分で「命の大切さ」というテーマを決め、一夏、ノート一冊の新聞記事を収集し、毎日、自分の意見を書き続けたのです。彼女が「命」をテーマに選んだのは、そのころ起きた神戸児童殺傷事件から、「若者の間で人間の命が軽く見られるようになってきたのではないか」という疑問、つまり自分の「問い」を立て、その疑問を解決する手段として、新聞記事を使ったのです。私は、宿題で提出されたノートの中から、何人か優秀な作品を選び、当時開催されていた「新聞スクラップコンクール」に応募しました。すると、彼女は1700人を超える応募作品の中から、審査員特別賞を受賞したのです。最初から審査員特別賞という賞が準備されていたわけではありません。松田さんの取り組みに感動した審査員の方々が、松田さんのためにわざわざ賞を設けてくれたのです。自分の「問い」に向き合おうという彼女の姿勢が、審査員の心を動かしたのだと思います。高校1年生の時から、真剣に「命」の意味に向き合ってきた彼女は、医学部に進学しました。きっといいお医者さんになっていることでしょう。

このように、新聞という昔ながらの身近なものを利用して、考察を深めることができます。新聞を広げたとき、ふとある記事が目にとまる、それが君のプリコラージュです。なぜ、自分がこの記事に関心を持ったのか分からない。しかし、なぜか気になる。それを深めていったら、あなたの未来が広がるかもしれません。

幸いなことに、附属中の皆さんは、宮崎県のNIEの第一人者である木幡先生の授業を受け、新聞を素材に様々な学習に取り組んでいます。いろいろと

先生に質問をして、自分なりのプリコラージュを広げてみてください。

NIE 教育に新聞を

宮崎西高1年の松田さん

新聞スクラップコン

自分で決めたテーマに沿って新聞を切り取り、主張や感想を加えて編集する作業を通じて、新聞の面白さや大切さを実感してもらう第4回「朝日・新聞スクラップコンクール」(全国新聞教育研究協議会・朝日学生新聞社主催)で、宮崎西高1年の松田さん(左)の「命の大切さ」が審査員特別賞を受け、千七百人を超える小学、中学、高校生から寄せられた作品の中から選ばれた。

自らのスクラップ集を手にする松田さん。「新聞を通していろいろなことを知る中、自分の意見も変わってきた。」(宮崎西高1年松田さん)

「命の大切さ」で特別賞

神戸・連続児童殺傷事件 「少年の心理に興味」

記事80本を編集

神戸の連続児童殺傷事件の直後、「若者の間で人間の命が軽く見られるようになってきたのではないか」という疑問、つまり自分の「問い」を立て、その疑問を解決する手段として、新聞記事を使ったのです。私は、宿題で提出されたノートの中から、何人か優秀な作品を選び、当時開催されていた「新聞スクラップコンクール」に応募しました。すると、彼女は1700人を超える応募作品の中から、審査員特別賞を受賞したのです。最初から審査員特別賞という賞が準備されていたわけではありません。松田さんの取り組みに感動した審査員の方々が、松田さんのためにわざわざ賞を設けてくれたのです。自分の「問い」に向き合おうという彼女の姿勢が、審査員の心を動かしたのだと思います。高校1年生の時から、真剣に「命」の意味に向き合ってきた彼女は、医学部に進学しました。きっといいお医者さんになっていることでしょう。

4月11日 朝日

松田さんの入賞を伝える記事



松田さんのスクラップノート 毎日、自分の考えがびっしり書かれている。